

---

# それは溶けたチョコのように . . .

花月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それは溶けたチヨコのように・・・

### 【Nコード】

N3023D

### 【作者名】

花月

### 【あらすじ】

幼稚園からの幼馴染で高校3年の朝子や永輝達5人。付き合っている朝子と永輝は幸せな日々を送っていた。しかし、それは突然5人を巻き込みボロボロに崩れてしまうことに・・・

## プロローグ（前書き）

永輝サイドです。

## ブローグ

例えるならば、それは溶けたチョコのようにドロドロとした甘い俺らの関係・・・

俺は朝子をずっと見ていた。朝子も見つめ返してくれた。それは変わらぬ永遠のものだと思

った。けど、それは間違った考えだと教えてくれたのは朝子だった。俺はいつ何処でお前を見

失ってしまったのだろう。

## プロローグ（後書き）

初めて此処で小説を書きます。花月です（・・）  
読みにくい文章ですが、最後まで読んでくれると、とてもありがたいです（・・）。（・・）シリアスじゃないも．．．

## 第1話（前書き）

朝子サイド

## 第1話

午前6時45分、誰もいないアパートの一室から出る私。誰もいないのは家族がいないから。

このことは、また別の話・・・。

私は毎日本を読みにある公園へ行く。大きくもなければ小さくもなく、何処にでもある公園。

表面的な理由は、ただその場所と時間が好きなだけ。でもこれも嘘ではなく事実。そして本当

の理由はまだ誰にも行ったことが無い、ていうか絶対言わない。

やっと公園に着いたのが7時8分。私は近くにある小さなベンチに腰掛け、一息吐く。何しろ

ここまで歩いてくるのは若いと言えど疲れる。

—— パラパラ

私は最近ハマっている本を開いた。特別有名でもない本。でも趣味にあうから好きな本。それ

から鞆から眼鏡を取り出し、かけて読んだ。それから何分たったのだろう、私はすっかり本に

夢中になっていた。そんな状態でいきなり背後から肩を誰かに触られた。でも私は驚かない。

そのことは毎日起こっているし、誰だかもわかる。言えばお決まりのこと。私は本を閉じ、

一応振り返った。後ろには勿論彼がいた。

「はよ。」

彼はそっけない挨拶をした。私はというつくすつと笑って返した。

「おはよう、永輝。」

「な、何だよ、気持ち悪いな。笑うなよ。」

永輝は少し顔を赤らめて言った。それを見てさらに笑う。あまりにも素直な反応に本当に同い

年なのかと時々思う。でもそんな永輝に愛しさがあるのも事実。

「フフ、別に何でもないけど。」

「嘘つけ、まだ笑ってるじゃねえかよ……。何がおかしい？」

「いやただ可愛いなあって思っただけ。」

「か、可愛いってからかってんじゃないぞ。」



私が公園へ行く本当の理由。それは・・・少しでも永輝といたいから。毎日公園に通ってるっ

て言ったら迎えに来てくれるようになった永輝。それはとっても嬉しかった。また永輝と共有

できる時間ができると思った。子供っばいと言ってからかっているけど、本当に子供っば

いのは私。それでも愛を確かめ合っているなら、それでもいい思っている。この生活がずっ

と続くと思っていたから・・・。

## 第2話（前書き）

永輝サイド

## 第2話

「ほら、行くぞ。」

俺はいつものように手を差し出した。朝子はまた微笑みながら俺の手を握ってきた。

「お前、今日笑いすぎじゃねえ？何かあったのか？」

いつものことなのに少し焦ってしまう俺。それをごまかすようになぜなのかとまた聞く。

「だから、永輝が可愛いなあっと思って。何回も言わせないでよ。」

それでも結構顔に出るタイプなんだからと付け加えた。それは意外だった。こいつは、学校

ではクール美人で有名、おまけに頭脳明晰。とてもではないが並大抵の男子が近づけるような

女子ではなかった。なのに、当の本人がこんな事いうなんて、中身はやっぱり普通の女子なの

だと思った。そんないわゆるギャップを持ち合わせている彼女に惹かれてる俺。

「お前のほうが可愛いから。」

朝子は、いきなりの俺からの発言にほんのり頬がピンクになった。  
しかしそれも一瞬で、次の

瞬間には元通りになり、皮肉を言い放った。しかも微笑みながら。

「永輝には負けるよ。」

俺はこんなことを繰り返してはきりが無いと思い、話題を変えようとする。不意に公園の時計

台が目に入った。時刻は遅刻寸前・・・。

「おい！！やべー、遅刻すんぞ！！！」

俺は朝子の手を握り締め、急いで公園から駆け出した。全速力で。  
頑張って朝子も着いてこよ

うとする。俺たちは、これから思いもよらない事件が待ち構えている今日と言つ日に向かって

走っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3023d/>

---

それは溶けたチョコのように...

2011年1月29日02時27分発行